# 準貧困とはなにか
# ―ウェルビーイングへの影響を事例として―

# What is Semipoverty?:
# The Effect on Wellbeing as a Case

小林 盾*
Jun Kobayashi

## Abstract

To clarify what semipoverty is, this paper investigates how it affects well-being. If a society continuously spreads, there should always be a group next to the poor population. Called "semipoverty," such group has no guarantee of avoiding monetary or subjective risks. Thus, quantitative data is statistically analyzed and supplemented by qualitative data of an interview. We found that the semipoor population had happiness between that of the poor and the general populations. Also, semipoverty did deteriorate happiness. Therefore, semipoverty, while not as severe as poverty does, reduces well-being. The paper scrutinizes risks of the semipoor population for the first time in a case study of wellbeing formation.

## Ⅰ．リサーチクエスチョン

### 1．準貧困層とは

貧困層だけが、リスクをもち困難に直面しているのだろうか。経済的な豊かさ・貧しさは、教育や就労や家族形成などライフコース（人生の軌跡）のさまざまな局面で、ライフチャンス（選択肢）を拡大させたり制約したりする。従来の不平等研究は、社会的弱者としてとくに貧困層に焦点をあて、セーフティネットの対象としてきた。

しかし、社会のメンバーがなだらかに連続しているなら、貧困層に隣接するグループがかならず存在する。そうした人たちを「準貧困層」とよぶなら、準貧困層がリスクをもたない保証はないし、貧困層とは異なる独自の困難・不利に直面しているかもしれない。にもかかわらず、これまで準貧困層のリスクは盲点となり、当事者にも周囲にも認識されてこなかった。

2015年に生活困窮者自立支援法が施行され、準貧困層を含む人たちへの支援がようやくスタートした。とはいえ、そのリスクは未解明のままである。

そこで、この論文ではウェルビーイング（とくに主観的幸福感）への影響に着目し、以下のリサーチクエスチョンにアタックする。ウェルビーイングとは、よい人生・生活をあらわし、主観

* 成蹊大学文学部 Faculty of Humanities, Seikei University

的幸福感、生活満足度、健康、ストレスがないことなどで構成される（たとえば小林 2022a; 小林他 2015参照）。

リサーチクエスチョン　貧困層に隣接する準貧困層にいることは、ウェルビーイングの形成にどのような影響をもつのか。

準貧困層は、どう定義できるか。貧困層の相対的定義は、世帯の収入にもとづき、等価可処分所得が貧困線（中央値の半分）未満のときと貧困とされる（たとえば岩永他 2018参照）。そこで、準貧困層を以下のとおり定義する。

定義　等価可処分所得が貧困線以上だが、中央値未満のとき、その世帯を準貧困層とよぶ。中央値以上のとき、一般層とよぶ。

この定義はもともと、渡辺由美子氏（NPO法人キッズドア理事長）が提案し、筆者が定義を小林（2021）であたえた。定義上、一般層はほぼ50%いて、準貧困層と貧困層の合計がのこりほぼ50%となる。

貧困層に隣接し、貧困層に出はいりするグループはこれまで、「ボーダー層」「周辺層」とよばれることがあった。ただし、準貧困層はそれらより広い範囲をカバーする。たとえば阿部によれば、子どもの貧困ではあるが、もっとも貧困の度合いが高い「困窮層」は6～7%、それにつぐ「周辺層」が14～17%いて、それ以外が「一般層」であった（阿部 2018:8）。困窮層はこの論文の貧困層、周辺層は準貧困層に相当する。

こうした準貧困層に特化した分析は、初の試みである。もしこのリサーチクエスチョンが未解明のままだと、支援の不要な一般層と、（生活保護など）経済支援のある貧困層のはざまで、ともすれば準貧困層だけがセーフティネットから取り残され、健康で文化的な生活から排除されて、社会を不安定化させかねない。さらに、準貧困層は貧困層ではないため、「自分たちは大丈夫」とリスクの自覚を当事者がもちづらい。このことも、問題をみえにくくさせている。

## ２．仮説

レイヤードは幸福感の規定要因として、「家族」「収入」「雇用」「地域と友人」「健康」「個人の自由」「人生観」というビッグ7をあげ、家族がもっとも規定力が高く、この順番で効果が低下する（Layard 2005、日本社会における幸福感の規定要因については大竹他編 2010がある）。そうであるなら、低収入は幸福感を低下させるはずであるので、つぎのように準貧困層の幸福感は貧困層と一般層の間となると予想できる。

仮説１　準貧困層の幸福感は、貧困層と一般層の中間であろう。

さらに、そもそも準貧困であることが、つぎのように幸福感を低下させると予想できる。

仮説２　準貧困層であると、幸福感が低下するだろう。

一見すると、どちらも当然のように思えるかもしれない。しかし、これまで準貧困であることの固有の効果が、分析されることはなかった。

## Ⅱ．方法

### 1．令和3年度人生100年時代における結婚・仕事・収入に関する調査

ここでは、量的データである令和3年度人生100年時代における結婚・仕事・収入に関する調査を分析する。家族構成、収入、主観的幸福感などが詳細に測定されている。内閣府男女共同参画局が実施し、筆者が調査検討委員会のメンバーであった。

オンライン（ウェブ）調査であり、2021年12月～2022年1月に実施された。母集団は全国の20～69歳個人であり、調査会社の登録モニターを対象とし、有効回収標本は2万人であった。男女、10歳ごと年齢、配偶者の有無、東日本と西日本でグループ化し、2020年国勢調査結果に比例させて回収した。

分析対象は、欠損値のない1万5018人である。

標本の内訳、平均は以下のとおりである（収入はすべて年収）。男性53.1%／女性46.9%、20歳代13.6%／30歳代18.5%／40歳代24.5%／50歳代22.2%／60歳代21.2%、平均年齢46.4歳、これまで未婚28.4%／現在既婚63.8%／現在離別6.5%／現在死別1.4%、小・中学校卒2.3%／高校卒39.6%／短大・高専卒10.4%／大学卒43.6%／大学院卒4.0%、正規雇用45.6%／非正規雇用21.6%／自営6.7%／無職26.1%、平均個人年収336.1万円（中央値250万円）、平均世帯収入606.6万円（中央値550万円）、平均等価世帯収入380.1万円（中央値350万円）。

### 2．変数

従属変数である主観的幸福感は、筆者の提案により、以下のように測定された。

質問　以下の時に、あなたはどの程度幸せでした（です）か。「とても幸せ」を10点、「とても不幸」を0点とすると、何点ぐらいになると思いますか。いずれか1つだけ選んでください。（それぞれ1つずつ）

| | とても不幸 | | | | | 中間 | | | | | とても幸せ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 20歳のころ | 0 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 |
| 現在 | 0 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 |

このうち現在についての幸福感を、従属変数とする。平均とともに、0とても不幸から4までの「不幸ダミー」と、6から10とても幸せまでの「幸福ダミー」を分析する。

現在の幸福感の平均は5.83であり、5中間よりやや高かった。幸福ダミーは51.5%、不幸ダミーは22.5%であり、幸福な人のほうが倍以上多かった。

独立変数は貧困層、準貧困層、一般層という貧困3グループである。では、貧困層、準貧困層はどれくらいいたのか。可処分所得が測定されていないため、貧困の定義に収入をもちいる。すると、等価世帯収入の中央値が350万円なので、貧困線は175万円となる（内閣府男女共同参画局 2022: 123）。その結果、貧困層は12.8%（貧困率）、準貧困層が36.7%（準貧困率）、一般層が50.5%いた。

### 3．インタビュー事例

こうした量的データを補足し、顔のみえる分析とするため、インタビューによる質的データを用いる。対象者は、等価収入が準貧困層にはいる1人である。

インタビューは、インタビューガイドを用いた半構造化インタビューとして、2022年に実施された。実施場所は、対象者が特定されかねないため開示できない。2回インタビューし、それぞれ1時間半～2時間かけ、会話は録音された。ライフコース、家族構成、ウェルビーイングなどが質問された。

データが変更されることはないが、匿名化にともない曖昧にした部分はある。

## Ⅲ．結果

### 1．だれが準貧困層なのか

仮説検証のまえに、準貧困層となるのはどのような人たちなのかを確認する。図1が、属性、社会経済的地位グループごとの、準貧困率、貧困率を報告する。

上図から、女性ほど貧困率、準貧困率ともに上昇する（以下すべて有意な差）。20代は貧困率が高いが、準貧困率は30代40代より低い。60代は貧困率も準貧困率も高い。

婚姻状態別では、現在既婚者で貧困率が低いぶん、準貧困率が高い。未婚者がもっとも貧困率が高く、そのぶん準貧困率が低い。

社会経済的地位別ではどうか。中図によれば、教育が高いほど、単調に貧困率も準貧困率も下がる。従業上の地位別では、正規雇用者がもっとも貧困率、準貧困率ともに低い。自営、非正規雇用者、無職となるにつれ、貧困率、準貧困率のどちらも上昇する。

収入別だとどうなるか。もともと貧困、準貧困が等価可処分所得によって定義されているため、つよく関連するのは当然である。下図によると、個人収入が400～599万円であっても、準貧困層が33.9%いた。世帯収入が400～599万円でも、貧困層はほぼいないが、準貧困層が68.9%いた。

### 2．貧困3グループによる幸福感の比較

仮説1どおりに、幸福感は貧困層、準貧困層、一般層で異なるのだろうか。図2が、幸福感と不幸率について結果を報告する（幸福率は省略したが幸福感と同じ挙動）。

これによれば、仮説1どおり、幸福感、不幸率ともに準貧困層では貧困層と一般層の中間となった。さらに、すべてのペアのあいだで有意な差があった。

### 3．幸福感を従属変数とした回帰分析

では、仮説2どおりに準貧困層であることが幸福感を低下させるのだろうか。表1が、幸福感を従属変数とした回帰分析結果を報告する。

モデル1で統制変数の効果を確認できる。女性ほど、若い人ほど、教育が高い人ほど、結婚経験がある人ほど、子どもが多い人ほど、有職の人ほど、世帯収入が多い人ほど、有意に幸せだった。これは先行研究とおおむね一致している。

独立変数である貧困層、準貧困層の効果はどうか。モデル2によれば、個人収入や世帯収入で統制してもなお、貧困層や準貧困層であると幸福感が有意に低下した。貧困層のほうが準貧困層より効果が大きいが、それでも準貧困層が独自の効果をもった。

なお、頑健性のチェックのため、結婚経験ありダミーを結婚人数に、教育年数を短大卒以上ダミーに、有職ダミーを正規雇用者ダミーと非正規雇用者ダミーと自営ダミーに入れかえても、結果は変わらなかった。従属変数を幸福率、不幸率としたロジスティック回帰分析をおこなったが、結果は変わらなかった。

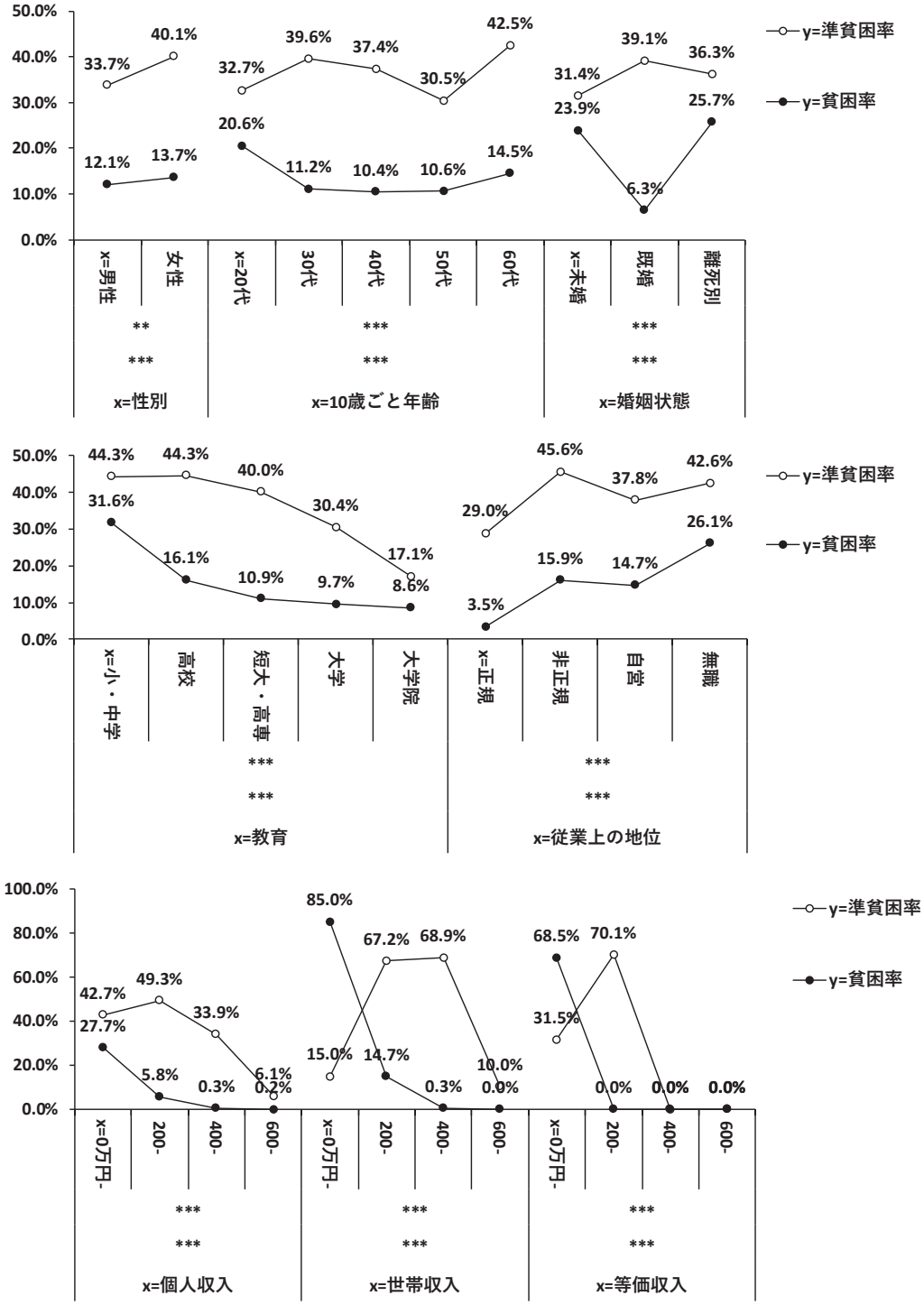


図1　準貧困率、貧困率を従属変数とした比率の比較

注記：データは令和3年度人生100年時代における結婚・仕事・収入に関する調査。N=15,018。
*5%, **1%, ***0.1%水準で有意（上段が準貧困率を、下段が貧困率を従属変数としたカイ二乗検定）。

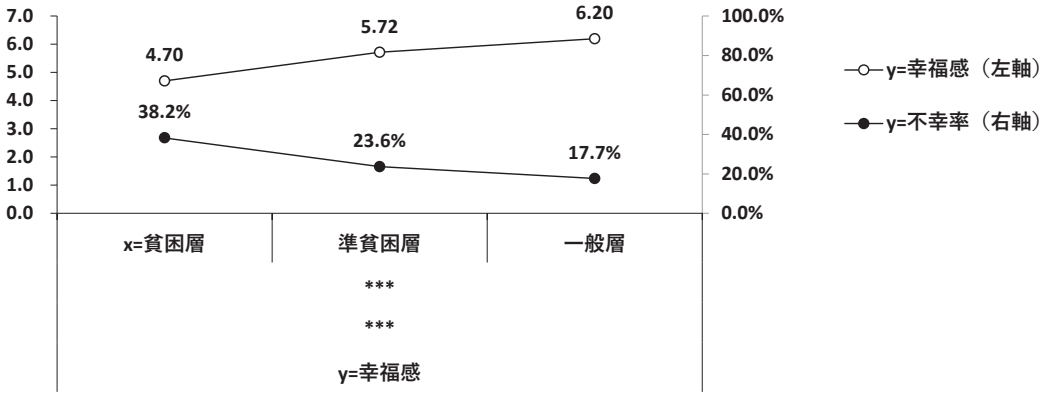


図2　貧困 3 グループを独立変数、幸福感、不幸率を従属変数とした平均、比率の比較
注記：データは令和 3 年度人生 100 年時代における結婚・仕事・収入に関する調査。N=15,018。*5%、**1%、***0.1%水準で有意（上段が幸福感を従属変数とした分散分析，下段が不幸率を従属変数としたカイ二乗検定）。また、貧困層、準貧困層、一般層のあいだで、すべてのペアで 0.01%水準で有意な差。

表1　幸福感を従属変数とした回帰分析結果

| | | モデル 1 | | 2 | |
|---|---|---|---|---|---|
| 統制変数 | 男性ダミー | −0.101 | *** | −0.102 | *** |
| | 年齢 | −0.023 | ** | −0.026 | ** |
| | 教育年数 | 0.076 | *** | 0.073 | *** |
| | 結婚経験ありダミー | 0.155 | *** | 0.153 | *** |
| | 子ども人数 | 0.056 | *** | 0.065 | *** |
| | 有職ダミー | 0.027 | ** | 0.008 | |
| | 個人収入 | −0.007 | | −0.008 | |
| | 世帯収入 | 0.168 | *** | 0.121 | *** |
| 独立変数 | 貧困ダミー | | | −0.084 | *** |
| | 準貧困ダミー | | | −0.031 | ** |
| 決定係数 | | 0.105 | | 0.108 | |

注記：データは令和 3 年度人生 100 年時代における結婚・仕事・収入に関する調査。N=15,018。値は標準化係数。

## 4．40代シングルマザーAさんの事例

以上の量的データ分析の結果は、質的データによって裏付けられるのか。ある40代のシングルマザーAさんは、未成年の子ども2人と暮らしている。等価収入は貧困線をこえ準貧困層ではあるものの、準貧困層としては低収入なほうである。

Aさんは高校中退後、いくつかの仕事で正規雇用、非正規雇用としてサービス職、販売職についた。20代で結婚し退職したら、そのあと夫に借金があることが判明した。非正規雇用者で復職し、2人を出産しつつ、借金を完済した。

ところがそのタイミングで夫が大病を患い、家計の担い手がAさん中心となり、準貧困層となった。結婚直後から夫の暴力、暴言、浮気を経験していたこともあり、40代で離婚した。現在は正規雇用者として販売職をしている。

Aさんの幸福感にはアップダウンがある。15歳から結婚まで（1不幸、3中間、5幸せとして）4だったが、借金の判明によっていっきに1不幸となった。出産によって3中間までもちなおしたが、夫の病気によりふたたび1不幸へ低下する。

離婚、正規雇用で働きはじめたことで、幸福感が上昇しはじめる。3中間をへて、現在は4となった。

このような幸福感の変動は、準貧困層に固有の可能性がある。貧困層であれば困難な状況が、一般層であれば恵まれた状況が、急変することは頻繁ではないだろう。たいして、準貧困層では貧困層と一般層のはざまで、家計だけでなく家族関係、就労、健康などが絡みあいながら、困難と安定のあいだを往復せざるをえないのかもしれない。

インタビューで「幸せとはどのようなものか」という質問にたいしてAさんは、シンプルに「お金です」と回答した。借金返済、シングルマザーなどを経験し、お金がなくても幸せになれるとは、かんたんにはいいきれないのだろう。

「経済的な貧しさとは」については、「（貧しいと）心がすさむ、人をうらやましいと思ってしまう」と回答した。つまり、収入が少ないと豊かな心でいられない。幸せとは収入に支えられるという回答を、裏返したものといえる。

## Ⅳ．考察

以上から、仮説1「準貧困層の幸福感は、貧困層と一般層の中間であろう」は支持された。幸福感、不幸率を従属変数とした比較によって、たしかに準貧困層の幸福感は中間となっていた。

仮説2「準貧困層であると、幸福感が低下するだろう」も支持された。幸福感を従属変数とした回帰分析によって、たしかに準貧困層が貧困層とともに幸せを抑制した。

したがって、リサーチクエスチョン「貧困層に隣接する準貧困層は、ウェルビーイングの形成にどのような影響をもつのか」に以下のように回答できる。

リサーチクエスチョンへの回答　準貧困層は、貧困層ほどではないが、固有の効果によって幸福感を低下させた。こうして、準貧困がもつリスクが、ウェルビーイング形成を事例としてはじめて検証された。

さらに、準貧困層には貧困層とは異なる固有のリスクがありうることが、Aさんの事例から示唆された。準貧困層であるAさんは、幸福感の上下動がはげしかった。なるほど、準貧困層の困難は、（借金、暴力など）貧困層と共通するものもあるだろう。しかし、貧困層よりは経済状況がよいため、不利であるとの自覚をもちにくく、かえって困難が深刻化しかねないのだろう。

準貧困層であってもそうでなくても、心からのびのび暮らし、人生に何度でもチャレンジできる――そうした、だれにとっても安全で安心な社会の実現のために、準貧困層のリスクの解明が求められていよう。

## 謝辞

本研究は成蹊大学アジア太平洋研究センターの研究プロジェクト助成を受けたものです（2022年度、パイロット研究「アジアにおける貧困とウェルビーイング：支援団体へのフィールドワークとインタビュー研究」、研究代表小林盾）。令和3年度人生100年時代における結婚・仕事・収入に関する調査のデータ使用にあたり、内閣府男女共同参画局から許可をえました。インタビューの実施にあたり、インタビュー対象者、仲介者の方がたに協力いただきました。分析にあたり、伊藤慈晃氏（成蹊大学助手、当時）に協力いただきました。この論文は小林（2022b）のアイディアを発展させたものです。

## 利益相反について

本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

## 参考文献

＜日本語文献＞

阿部彩 2018年「日本版子どもの剥奪指標の開発」『子ども・若者貧困研究センターワーキングペーパー』第1号.

岩永理恵、卯月由佳、木下武 2018年『生活保護と貧困対策：その可能性と未来を拓く』東京：有斐閣.

大竹文雄、白石小百合、筒井義郎編 2010年『日本の幸福度：格差・労働・家族』東京：日本評論社.

小林盾 2021年「総括　子供の貧困の実情と求められる支援：令和2年度子供の生活状況調査からのメッセージ」内閣府『令和3年子供の生活状況調査の分析報告書』146-152.

――― 2022年a「子どもの貧困とウェルビーイング：初の全国調査による実態解明」『成蹊大学文学部紀要』第57号：33-39.

――― 2022年b「豊かで幸せな人生100年時代を目指して：シングルマザーと貧困の分析」内閣府男女共同参画局『令和3年度人生100年時代における結婚・仕事・収入に関する調査報告書』132-133.

小林盾、カローラ・ホメリヒ、見田朱子 2015年「なぜ幸福と満足は一致しないのか：社会意識への合理的選択アプローチ」『成蹊大学文学部紀要』第50号：87-99.

内閣府男女共同参画局 2022年『令和3年度人生100年時代における結婚・仕事・収入に関する調査報告書』.

＜外国語文献＞

Layard, Richard. 2005. *Happiness: Lessons from a New Science*. London: Penguin Press.